

第 部門 ため池に対する地域住民の意識構造特性に関する研究 ～稲美町を事例として～

大阪工業大学工学部 学生員 盧 昌勲
 大阪工業大学工学部 学生員 赤松 貴史
 大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. はじめに

ため池は都市の拡大に伴う農地の減少やかんがい設備の充実により廃止されるなど、「農業用水の貯水」という本来の機能を失いつつある中で農家の減少や高齢化により、今後の維持・管理が困難となっている。一方、近年では農業用水の貯水機能だけではなく多様な水生生物の存在や一定の広がりを持ったオープンスペースの確保、さらには水面やため池周辺の緑地などによる景観機能の保持など多様な地域資源として再評価されつつあり、ため池周辺に公園や歩道を設置するなど市民の利用・活用を意図した整備がみられはじめています。こうした動向は、ため池がこれまで地域に果たしてきた役割の重要性のほか、価値の多様性の増幅・高揚の可能性を示唆しており、ため池の維持・管理等に一般市民が果たす可能性が潜んでいると思われる。本研究では多数（約90）のため池が存在する稲美町を対象として、ため池に対する住民の意識構造特性と、維持・管理に対する住民参加の可能性を明らかにする。方法としては稲美町の住民にアンケート調査を行った。（実施期間：2004年10月14日～2004年10月24日、回収件数：156件）

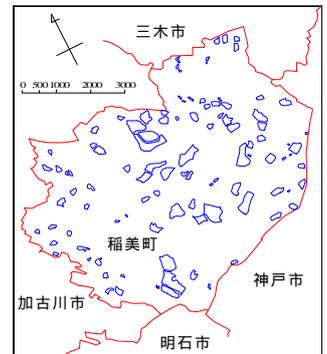


図1 稲美町におけるため池の分布図

2. ため池に対する住民の意識特性

ため池に対する住民の意識等をみたのが図2-1～12である。性別では、ため池の認識については男性よりも女性の方が高く、問題の認知については男性はため池のゴミ、生活廃水、不法投棄、管理者不足で、女性は悪臭、生態系の消失の項目でそれぞれ高い。また日常の利用については散歩利用が全体的に最も多く、女性は散歩、男性は釣りやジョギングについて多い。次に職業別では、認識については農家と公務員が高く学生は低い。問題の認知についても全体的に回答の多かったゴミ、生活廃水などにおいて同様である。また利用については主婦が散歩、学生が釣りが多い。居住年数別では、認識については居住年数が高いほど高い傾向が見られ、問題の認知についても同様であるが居住年数が10年未満の人でもゴミ、

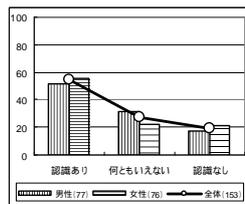


図2-1 ため池認識（性別）

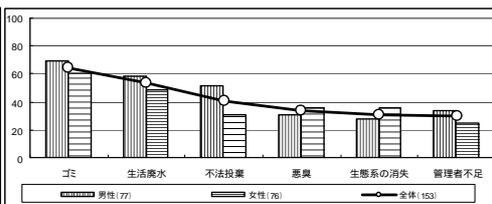


図2-2 問題の認知（性別）

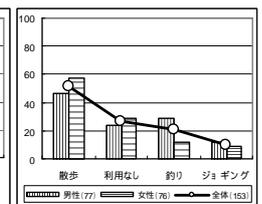


図2-3 日常利用（性別）

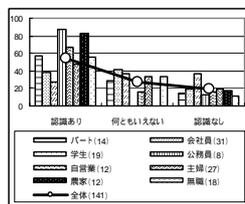


図2-4 ため池認識（職業別）

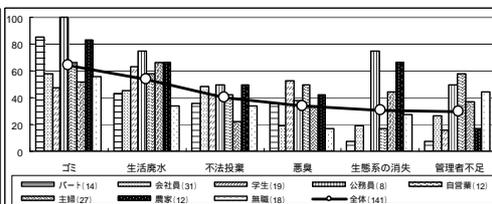


図2-5 問題の認知（職業別）

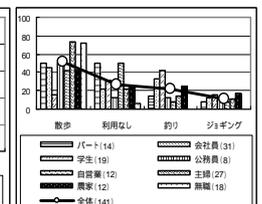


図2-6 日常利用（職業別）

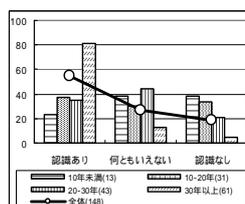


図2-7 ため池認識（居住年数別）

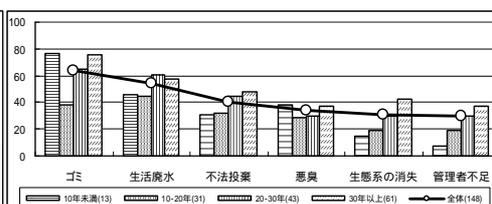


図2-8 問題の認知（居住年数別）

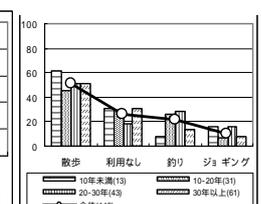


図2-9 日常利用（居住年数別）

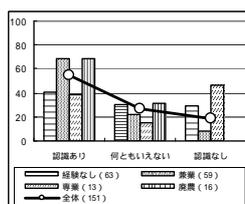


図2-10 ため池認識（農業経験別）

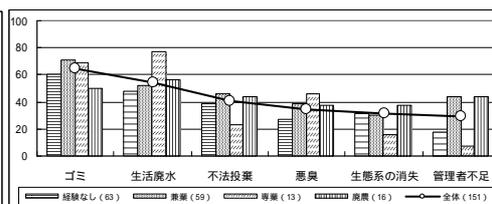


図2-11 問題の認知（農業経験別）

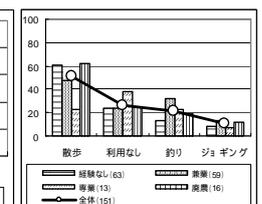


図2-12 日常利用（農業経験別）

居住年数が高いほど高い傾向が見られ、問題の認知についても同様であるが居住年数が10年未満の人でもゴミ、

悪臭の項目で高いことがわかる。利用についても同様に居住年数が長いほど多い傾向が見られ、10年未満の人でも散歩、ジョギングが多い。農業経験別では、認識については基本的に経験のある人が高い。問題の認知についても同様に経験のある人が高く、経験のない人でもゴミ、不法投棄、生態系の消失の項目で高い。利用については経験の無い人と廃農者が散歩利用で多い。以上より、全体として過半数の住民がため池を日常にて認知しながら主に散歩に利用しておりゴミや生活廃水などの問題が主として意識されている。この傾向は主婦層を中心とする女性のほか農業従事者や公務員など日常生活や就業が居住地又はその近隣となっている層で高く、居住期間の長い層や農業経験層でも高い。つまり、地域密着性の高い層で認知、認識、利用が高いことが分かる。

3. ため池のイメージと維持・管理の可能性

ため池の景観と役割に対する意識において因子分析を行った(図3-1)。因子負荷量が0.5以上の項目を見ると因子1では「安らぎ」「快適さ」となっており、これらは『安堵感』を示していると考えられる。因子2では「交流の場」「文化財産」となっており、これらは『地域資源』を示していると考えられる。因子3では「落ち着き」「懐かしさ」となっており、これらは『郷愁感』を示していると考えられる。この3つの因子で累積寄与率は約57%と低いものの因子1だけで約46%となっており『安堵感』がかなり強く影響している。次にため池について大切にしていきたいことについて因子分析を行った(図3-2)。同様に評価すると因子1では「自然の豊かさ」「生態系」となっており、これらは希少性の意味を含んだ『貴重な自然資源』を示していると考えられる。因子2では「景観の広がり」「眺め」となっており、これらは『情景』を示していると考えられる。因子3では「歴史・言い伝え」「水のきれいさ」となっており、これらは『文化資源』を示していると考えられる。この3つの因子で累積寄与率は68%と若干低いものの因子1で約49%と高い。寄与率が高かった因子1の評価(概念)である『安堵感』及び『貴重な自然資源』をとりあげ、同時にこの2つの概念と因子2,3を含む残りを新たに総合的な概念として『郷土愛』を設定し、これら3つの構成概念がため池の景観や維持・管理の参加意識に関係付けられていくものと考え、これを共分散構造分析で構造化を試みた。この結果が図3-4である。これによると、『安堵感』と『貴重な自然資源』が『郷土愛』に影響しながら、ため池の維持・管理に対する住民参加の重要性と具体的参加に関わっていることがわかる。

	因子1	因子2	因子3
安らぎ	0.7024	0.1608	0.2345
快適さ	0.6435	0.2217	0.3506
交流の場	0.1749	0.7582	0.1536
文化財産	0.1677	0.5173	0.2481
落ち着き	0.2752	0.2666	0.8517
懐かしさ	0.3459	0.1995	0.5517
固有値	4.6194	0.6595	0.4668
寄与率(%)	46.19%	6.60%	4.67%
累積(%)	46.19%	52.79%	57.46%

図3-1 因子分析(ため池の持つ景観と役割)

	因子1	因子2	因子3
自然の豊かさ	0.8613	0.1111	0.2931
生態系	0.8498	0.2940	0.1463
景観の広がり	0.1808	0.7954	0.2353
眺め	0.1844	0.7651	0.2591
歴史・言い伝え	0.1528	0.2050	0.6464
水のきれいさ	0.3107	0.3480	0.5472
固有値	2.9236	0.8050	0.3517
寄与率(%)	48.73%	13.42%	5.86%
累積(%)	48.73%	62.14%	68.00%

図3-2 因子分析(ため池について大切にしていきたいこと)

	景観と役割	大切にしていきたいこと
因子1	安堵感	貴重な自然資源
因子2	地域資源	情景
因子3	郷愁感	文化資源

図3-3 ため池評価の因子軸

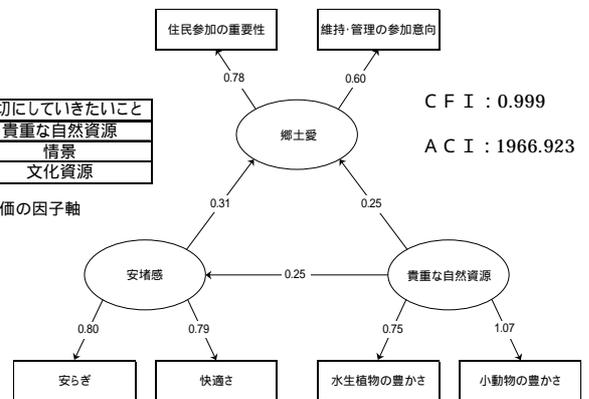


図3-4 共分散構造分析(ため池イメージと維持・管理の参加意向)

4. まとめ

住民のため池に対する意識特性としては、日常生活における認識が高い人が全体的に多く、ゴミ問題や生活廃水について問題意識が高いことから、ため池を環境問題として意識している人が多いことが分かる。属性別では女性、公務員、農家など職場が地元の人意識が高く、また居住年数が長く農業経験のある人で意識が高いことがわかる。即ち、毎日を地元で過ごすことの多い人によって意識され散歩などに利用されているとみてよいであろう。ため池は、『安堵感』といった精神的なものと『貴重な自然資源』といった財産的なイメージ評価が考えられ、この二つの概念が『郷土愛』さらにはため池の維持・管理の参加意向の重要な意識に繋がっていると考えられることから、ため池の資源としての価値を高め浸透させることにより維持・管理などに住民参加を促すプロセスづくりが重要と言えよう。